

眠狂四郎孤劍五十三次

柴田鍊三郎



新潮文庫

おむりきよろしろう こけん ごじゆうさん つぎ
眠狂四郎孤劍五十三次

新潮文庫

し - 5 - 21



昭和五十三年七月二十五日 発行
平成 六年一月十日 二十七刷

著 者 柴 田 錬 三 郎

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株 式 新 潮 社

郵 便 番 号 一 六 二
東 京 都 新 宿 区 矢 来 町 七 一
營 業 部 (〇三)三二六六一五一
電 話 編 集 部 (〇三)三二六六一五四〇
振 替 東 京 四 一 八 〇 八 番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・東洋印刷株式会社 製本・有限会社加藤新栄社

© Eiko Saitō 1967 Printed in Japan

ISBN4-10-115021-4 C0193

新潮文庫

眠狂四郎孤劍五十三次

柴田鍊三郎著



新潮社版

2477

眠狂四郎孤劍五十三次

初春日本橋

節季が来ていた。

煤払いをおわった江戸の市中は、正月を迎える準備で、あわただしくなっていた。

この月、十五日を区切りにして、諸方の遊び場、物見の場が、すべて休みになってしまふ。遊山見物もおわりである。代つて、市中いたるところに、年の市が立つ。

各町内では、鶯の者が、辻に小屋を建て、メ飾りを商う。これは、大晦日夜半までのあきないで、元日の朝には、小屋の跡もとどめず、きれいに掃除も行きとどいている。

餅搗きの音が、きこえる。

割竹をさわがしく叩きたてて、節季ぞろ、と喚きたてて行く乞食の姿も多くなる。

通行人の足どりも、なんとなく、あわただしい。

その雑沓の中を、眠狂四郎が、ゆっくりと往く。

旧い年を送り、新しい年を迎える。この行事に忙殺されている市巷にくらし乍ら、この男は、次元の異った世界にいる。

煤払いにも、餅搗きにも、門松飾りにも、この男は、無縁である。

いま、通りすぎようとしている佐久間町河岸は、松市が立ち、往還の左右は、大小無数の松で、森林と化した観がある。門を飾る大松は、年の市では売らず、この松市で需めなければならない

ので、群衆の殺到も、もの凄くなる。

眠狂四郎にとっては、武蔵野の森が、ここへ移されたような光景も、べつに興味のないことであつた。

ただ、一年ぶりに飄然^{ひようぜん}として、江戸へ戻つて来たこの異相の浪人者には、別の用事が、正月には待ちうけているようであつた。

その用事というのは、何か――。これから老中・水野越前守忠邦^{すゑのぶ}邸へおもむいて、側用人^{そばうりだん}武部仙十郎から、きくことになる。狂四郎は、越後の雪ふかい湯宿で、仙十郎の手紙をもらったのである。

常盤橋御門を入ると、視界の様子は一変する。

大名屋敷のならんだ内桜田は、正月が近づいていても、流石^{さすが}に、その多忙ぶりは、往還にまでみせてはいなかつた。

門松もまだ飾られてはいない。

歳の尾の祝賀の使い番が、白く一重に咲いた室咲きの梅を、進物として、従者に持たせた姿などが、わずかに、節季らしい景色となっている。

「眠狂四郎殿、とお見うけつかまつる」

背後から、声がかかり、登音^{あしやと}がすたすたと近づいた。

狂四郎は、べつに振りかえりもせぬ。

つと、右脇へ肩をならべたのは、どこか小藩の家中、それもあまり身分の高くない定府^{じやうふ}、とみえる男であつた。

笑いかけて来た顔は、大層愛嬌^{あいせう}のあるものだった。目も鼻も口も、顔ぜんたいが、すべて、丸

かった。狂四郎よりも首ひとつ低く、小肥りで、武士としては、およそ威厳がない。

「結構な日和でござる」

男は、云った。

云われるまでもなく、狂四郎の瘦せてとがった肩に当たっている陽ざしは、節季のものらしくない、あたたかさであった。

「卒爾に、声をおかけ申したご無礼、お詫びつかまつる。実はな、昨夜、吉原の角万で、お手前と、部屋をとなりあわせたのでござる。お手前は、吉原などは、どの店の天水桶のかたちはこうとまで知りつくされて居られようが、身共は、これで二度目でござってな。それが、なんと、この矮小の、野暮もきわまる醜男が、吉原芸妓に、もてたのでござる。……なんだそうでござるな、吉原芸妓というのは、座敷へ出るにも、二人ずつ、組んで出て、絶対に枕席には侍さなない規則があるのだそうでござるな。もし、枕席に侍したことが露見すると、見番の札が削られ、その茶屋は提灯を止められるのだそうでござるな。それが、どういう風の吹きまわしか、四人呼んだ芸妓のうち、柳のようにほっそりした、どこやら影のうすい、おとなしい女が、身共のからかいを、真に受けてな、諾と申したのでござる。いやはや、身共の方が、びっくりつかまつってな——」

よく喋る。

すてておけば、とめどなく、喋りつづけそうである。

狂四郎は、道三橋の脇を過ぎ、大名小路の入口に来た時、その饒舌を止めることにした。

「お主！」

その語気に、鋭いものを含ませた。

「なんでござるな？」

「刺客であろう、お主？」

「……………」

急に、男は、口をつぐんだ。

「わたしを殺すのに、手数をかけて、わざと右わきに竝んだり、喋りたててみたりしているが、徒勞のようだ。お主の手の内が見えて居る」

「……………」

「お主は、わたしが、お主を刺客であることを看破るのを、あらかじめ計算していたらしい。およそ刺客らしくないお主が、それだけの要心をしたのは、結構だ。ただ、わたしが、お主の手の内まで見て取るということまでは、思いつかなかったようだ。……お主は、わたしが、抜き討とうとするのを待っている。その刹那に、お主は、わたしの右手を押えておいて、脇差を抜いて、刺すつもりであろう。……無駄だな」

男の足が、停った。

狂四郎は、そのまま、同じ歩調で、大名小路に入った。

ものの十歩も、はなれたらうか。

「眠狂四郎殿！」

男が、呼んだ。

「身共は、都田水心と申す。近い将来、必ず、お手前を、討ち果してみせ申す！」
もとより、狂四郎の返辞はなかった。振りかえりもしなかった。

水野邸内表長屋の、側用人宅の書院に坐った狂四郎は、しめったにおいのこもっている冷たい空気に、なつかしいものをおぼえていた。

老人は、この自分を死地におもむかせる依頼を、この書院で、いくど、したことだろう。生きているとは到底還れぬ、と思われる仕事を、小犬かなにかをすてて来て貰おう、といった、ぬけぬけした口調で、老人はたのみ、それをなしとげて報せに來ても、まるでそれが当然のこゝろのように、「あそこには、美人が揃っていた筈じゃが、一人ぐらいは抱いたかの」

などと、笑っている老人であった。

狂四郎は、五尺足らずの、額と額骨が異常に突出した、およそ風采のあがらぬ姿が、ひよこひよここと入って来て、座に就くと、

「老人も、来年は古稀か」と、云った。

「年寄の冷水は、いい加減にせい、というのかな。なかなか、そうは参らぬ。あと十年は、ご奉公いたさねばならぬの。公儀にも人は居らぬが、当家にも人は居らぬ」

狂四郎は、無表情で、老人を視ている。知り合ってから十年になる。全く同じ貌をしている。この老人は、三十年も前から、すでに年寄であったか、と疑われる。

「このたび、殿は、本丸に入られた」

武部仙十郎は、云った。

これは、越後の湯宿にいた狂四郎の耳にも、つたわっていた。今年五月に、忠邦の強敵であった本丸老中・水野出羽守が逝っていた。

老中筆頭・大久保忠真が、出羽守が空けた座へ、はたして、西丸老中の忠邦を据えるかどうか、

大名・旗本たちは、それぞれの不安と期待をもって、眺めていたのであった。

「殿が本丸に入られても、先月までは、べつに、殿中に波も埃も立たなかつたな。ところが、この月に入って、妙なことが起つて参つた」

「……………」

「西国十三藩の大名衆が、一齐に、正月に帰国を願ひ出た。これまでにあり得なかつたことじゃ。……薩摩をはじめ十三藩の大名衆が、ひそかに一堂に集つて、謀議したふしがある。本丸に入られたわが殿に対する、ただのいやがらせであれば、なんのことはない。もっと腹黒いこんたんが、うかがわれる」

「……………」

「貴公に、ひとつ、十三藩を対手にしてもらおうと思つてな」

「わたし一人ですか？」

「助っ人が欲しければ、何十人でも、付けるが、それは、貴公の性分に合うまい」
老人は、にやりとしてみせた。

「ご老人——。わたしは、公儀庭番でもなければ、甲賀伊賀衆でもない。べつに忍びの術を修業もして居らぬし、そういう行為も好まぬ」

「なんの……、貴公に、謀議の内容をさぐる隠密のまねをしてもらいたい、と申して居るのではない。……白昼堂々と、振舞つてもらつて結構だ」

「たとえば？」

「たとえば——そうさの、天下の大道で、大名に赤恥をかかせる、などというのは、どうであるの？」

「まず、手はじめに、相手にえらんでもらいたいのは、正月元旦、年始の賀儀もせず、帰国する者が二家ある。萩の毛利と、岸和田の岡部——。公儀もなめられたものなのだ。これが、五十年前なら、たちまち、改易の処分をくらう振舞いだが……」

十一代將軍家齊は、すでに晩年を迎えて、幕府年中行事を煩しがるようになり、最も盛観であるべき歳首の儀式も、ここ三年ばかりは、不例を理由にして、御座の間へも、白木書院へも姿を現していなかった。したがって、献上太刀目録の披露も、呉服下賜も、月番老中が代りにつとめ、賜盃の式も挙げられてはいなかった。

今年もまた、出座がないことは、わかっていた。それにしても、元旦の拝賀を黙殺して、早々に帰国するとは、よほどの僧上と云わねばならぬ。あきらかに、初春の月番をつとめる水野忠邦に対するいやがらせであった。

「どうであろうの、岸和田の岡部あたりは——。当代は、男盛りで、智慧もまわるし、野心も強いし、癩癩でもあり、相手にまわして不足はない」

「……………」

「わしが、察するところ、十三藩の大名衆それぞれ、謀議の連判状を、懷中にして、帰途につく模様じゃな。そいつを、岡部長慎殿の懷中から、まきあげてもらえれば、幸甚じゃ。……元旦の朝ぼらけ、場所を日本橋の橋上あたりにえらんで、堂々と、大名衆の懷中から、大切なしろものを、まきあげる、などという趣向は、また格別の愉快ではないかの」

途方もない難事を、平然と口にして、老人は、にやにやしてみせた。

狂四郎は、依然たる無表情で、老人の顔をじっと見まもっていたが、

「釣りあげるには、餌えさが要るが——」
と、云った。

この老人が、餌えさを用意してくれていない筈はないのだ。
はたして、老人は、

「うむ。いま、これへ——」

と、こたえて、手をたたいた。

女中にとりなわかれて、入って来たのは、武家娘であった。

美しかった。鼻梁びなせがやや高すぎる難点は、ふっくらとした頬の丸みが救っていたし、二重にじゅうの輪廓りんかくの薄さは、ほっそりと長い頸くびすじの線の綺麗きれいさがおぎなっていた。肌の白さ、肌理きぬのこまかさは、無類むるいであった。

「理江りえ、という。これの父親は、岸和田藩の小納戸頭取こなんどであったが、三年前に、殿の痼癖こくへきにふれて、手討てうちちにされて居る。……餌えさにならぬかの？」

狂四郎は、しかし、それには、すぐこたえず、娘へ、冷やかな眼眸まなまじをくれていたが、
「そなた、まだ、男を知らぬ生娘か？」

と、妙な質問をあびせた。

「はい」

理江りえは、頷うなずいた。

「父の讐せうを復つためには、肌を衆目にさらしても、堪たえる覚悟がなければならぬ。それができて
いるか？ 苦界くがいに身を沈めて、敵かたきをさがした女もいるぞ」

「はい。覚悟は、できて居りまする」

狂四郎は、その返辭を待つて、老人へ視線をまわした。
「餌になるようだ。……どんな趣向にするか、大晦日まで、どこかで、酒をくらい乍ら、思案いたそう」

狂四郎は、無想正宗ましまねを携まげて立ち上った。

書院を出て行こうとして、ふと思ひ出したように、

「ご老人。ここへ参る途中で、刺客に出会った。わたしを、貴方あなたに会わせまい、としたところをみると、十三藩がたにも、すでに、貴方の邪魔だてを、かなり気にしている者がいることだ」
そう云いのこした。

元旦明け六つ——江戸の空は、雲影ひとつとどめていなかった。

ただ、風が鳴って、寒気はきびしかった。

市中は、ひっそりとしている。町家の板戸はみな閉じられて、往来には人影は絶えている。

東雲がたなびく頃までは、熱鬧おちかのちまたであったものが、夜が明けるとともに、嘘のように、しーんとひそまりかえって、急に往還の幅が広くなつたのをおぼえさせる。

ただ、町毎の辻に、葎よす賣うりだだけであった。紙たこ賣うりである。正月元日に、あきないをするのは、紙たこ賣うりだけであった。

しかしまだ、この時刻には、子供たちも、屠蘇とそを祝っていないので、おもてへ駆け出して来てはいない。

江戸の中央——日本橋が、二十八間の橋上に、人影を絶っているのは、この朝だけである。

六間の幅が、十間にも見え、霜を置いた葱宝珠高欄が、高く感じられる。

北方に上野の山、西方に江戸城、南方に富嶽が、そびえたち、そして東は海づら近く、初陽は、波を渡って、さしそめている。

まさしく、風色真妙、絵となって動かぬ眺めであった。

平常なら、もう、数百艘の漁船、楫船が、ひしめくように入ってきて来ている頃だが、この朝ばかりは、一艘も漕ぎ寄せられてはいない。橋下には、数十艘が、ひっそりとねむっている。

「は、はっくしょっ！」

不意に、ちょうど橋の真下の一艘で、大きなくしゃみをした者がある。

豆しぼりを泥棒かぶりにした巾着切の金八であった。

「ちよっ、寒いや、骨が鳴らあ、こん畜生！ 武者顔いも、半刻つづくと、いいかげん、志気やら小便やらを、そそうすらあ。早く来やがれ、五万三千石野郎！」

ぶつぶつ、独語している折――。

室町の方角から、かなりの早さで、行列が近づいて来た。

華美に流れ、分限を超え、異風を凝す風潮のこの時代にあつては、ひどく地味な行列であった。槍、打物、挟箱、長柄傘、乗物――いずれも黒色を基調としている。

岸和田藩は、初代岡部宣勝が、寛永九年、摂州高槻より移封されて、入城して来たその日に、飢えた農民の大集団の強訴に遭って以来、代々、領内いたるところで、一揆、逃散が起っている藩であった。

貧乏藩として、下からかぞえた方がはやくらいであった。そのために、藩の方針は、節約ひ

とすじであった。行列が質素なものやむを得なかった。

下座触れ役の先徒が、橋袂に達した時であった。

突如――。

京橋がわから、ツツツ……と橋上へ奔り出て来た者があった。

美しく正月の晴着をまとった武家娘であった。

凜と、柳眉を張りつめた貌は、武部老人が眠狂四郎に餌として与えた理江のものにまぎれもな

かった。

なかばまで駆け渡ると、裳裾をわけさばいて、ピタリと正座した。

「あれは？」

「なんだ？」

先徒や、それにつづく小人目付らは、不審の眉宇をひそめたが、次の瞬間、理江の右手に懐劍がひらめくのを視て、ぎょっとなった。

さらに――。

供連の面々を、仰天させたのは、次に為した理江の振舞いであった。

懐劍の切っ先を胸に当てるや、胸高に締めた帯を、さっとまっ二つに切きはなして、晴着の前後を左右に押しひろげ、胸の隆起から腹部まであらわにした。とみるや、切っ先を、腹部の左わきに擬した。

すなわち、切腹の身構えをとったのである。

燃える緋色の下着の中に、白い柔肌を、惜しげもなく、初陽にさらしつつ、理江は、声を張って、行列へ呼びかけた。